

二〇二五年度

国

語

《注意》

- 一、問題は、一から二十一ページにあります。始まりのチャイムが鳴ったら必ず確認してください。
- 二、問題を解く前に、解答用紙に受験番号と氏名を忘れずに記入してください。
- 三、答は、すべて解答用紙に書いてください。句読点や記号などは字数にふくめます。
- 四、解答用紙の一行のわく内には二行以上書かないようにしてください。

「一」 次の文章を読んで後の問に答えなさい。

〈注一〉

プールとクラブハウスという電電公社が新しくかく得した領土に建てられた建築群をぬけると、そこで左手側に見えていた林は終わる。ここから電電公社部族にとって外界が始まっていることを示すように足下の砂利道も再びアスファルトへと切りかわる。そのアスファルトは十一棟の前にしかかれていた新品のじゅうたんのようなものではなく、使い古され、色あせていた。電電公社の団地という新しい集落の砂利道と、新宮に昔からあるくたびれたアスファルトは二メートルほどの小さなコンクリート製の橋でつながっている。僕と母ちゃんはその橋をわたる。

問二

はく

かあ

橋から下をながめると川底の见えないドブ川が流れている。水はにごっており、ゴミも捨てられている。歩いてきた砂利道の両たんにある排水溝はこのドブ川へとつながっている。つまりドブ川の水は電電公社の団地から流れてきているのだ。一つ一つの家から流れ出る排水がそこを通り、僕と母ちゃんが歩いてきた砂利道の下を流れていく。ドブ川の水面にはところどころ油のようなものやシャボン玉のようなあわが見える。

問三

自然そのものではなく、かといって完全な人工物でもないあいまいな存在のドブ川は、僕が置かれている状況ようと似ている気がした。すべてが止まっているように整理され配置されている団地内の要素とはちがい、ドブ川の水は動いている。しかし、汚水はすぐトンネルへと消えていく。消えるまでの一しゅんだけかい間見える、地面の下に流れる水の存在に僕は興味を持った。水の存在というよりも水の移動に、と言ったほうがいいかもしれない。トンネルの先はどうなっているのだろうか？ 地下でどうこうと流れている水の世界は、僕の住んでいる世界よりも変化に富んでいるように思えた。ドブ川はプールとはちがい底が見えないほどにごっていたが、運動としてはよどんでいなかった。ドブ川は、自分の不自然さを自覚させ、本来あるべき姿の見本となった。

問四

ドブ川はプールに行かないタカちゃんとの大事な遊び場でもあった。タカちゃんは海ぼうずのことも、プール

の中のことも知らない。しかし、ドブ川ではタカちゃんが首長^{しゅちょう}だった。タカちゃんは自然を熟知していた。虫や魚の名前を知り、植物をくしして道具をつくることが得意だった。一方、僕には、きみような冒険^{ぼうけん}を始めようとけしかけるしゅん発力や企^き画力があつた。

「僕らの家から流れ出たこのドブ川は、もしかしたら海につながっているのではないか？」

ある日、僕はこの仮説を確かめるべく、ただちに行動に移すことを提案した。こういうときタカちゃんは、いつも否定せず、しかし無茶な行^い為をするでもなく、どうすれば実現するかという具体的な対策を考えてくれる。ドブ川のなぞにつき当たった僕とタカちゃんは、冒険の筋として、まずはいったん家にもどり、道具をそろえてくることにした。童話『エルマーのぼうけん』^{〔注2〕}でエルマーは年老いた猫^{ねこ}から冒険に必要な道具を教えてもらう。ジャックナイフ、輪ゴム一箱、ゴム長ぐつ、磁しゃく、ヘアブラシ、色のちがった七本のリボン、もも色のぼう付きキャンディー二ダース、チューインガム、ピーナツバターとジェリーのサンドウィッチ二十五個、リングを五個。それにならって僕たちは道具を三つ用意した。長ぐつと懐^{かい}中電灯とロッテのブルーベリーガム。準備が整った僕とタカちゃんは、当然のことながら親には伝えずにドブ川の出発地点である十一棟の前の砂利道に集合した。

砂利道の開始地点のわきから始まる排水溝にはめこまれたこうし状の鉄製のふたは、かぎがかけられているわけでもなく、こうしの間に両手の指を入れ、力を入れて引っこめくと簡単に外すことができた。一寸先は闇^{やみ}かと思われたが、排水溝のすき間から、光が差しこんでいる。光は黒い水面を等間かくに照らしていた。長ぐつで水の中にふみ入ると、予想していたよりも水深は浅い。覚^{おぼ}えを決めた僕らは、懐中電灯のスイッチをおし、大人にばれないように鉄製のふたを閉め、ドブ川の冒険を始めた。

「恭くん！ ガガンボに気をつけて」

ガガンボとは足の長い蚊かのようなきょ大なこん虫だ。タカちゃんはありとあらゆる虫をはあくしている。同年なのに僕とはまったくちがう人生を歩んでいるタカちゃんと暗闇を歩く。僕一人だったらこわくてなにもできないけれど、タカちゃんといれば僕も起爆剤ばくざいとしての職能を存分に発揮できる。タカちゃんと僕とがいっしょに遊ぶことで幕を開ける二人劇の舞台ぶでは、ふだんは虫のことなどほとんど知らないまま通り過ぎてしまう僕の視覚も変容した。僕はガガンボをきょ大なてい察機のようにとらえていた。ガガンボに見つからないように身をかがめて歩いていく。

「ガガンボにさされたらたまったもんじゃないよ。蚊に食われたときよりもかゆくなる」

タカちゃんはそう言うとき暗闇に懐中電灯の光線を放ち、ガガンボを発見しては僕ににげるように指示した。彼はこわくないのだろうか。タカちゃんはたよになる男だが、同時に僕の自信を失わせる存在でもあった。ゆれ動く思考によって停たいする僕の先には、懐中電灯というレーダーをくしし、暗闇の中でてい察機を発見しようと必死になるタカちゃんの姿がある。

水面上に長ぐつが当たって生み出される水の音楽がドーンという砲撃ほうげきの音にも、気持ちをやわらげる治ゆの音にも聞こえる。興奮したタカちゃんは、冒険物語の主人公というよりはジャングルの狩獵民しやりやうのようだ。僕の中では恐怖心きょうふを起点にした複眼的な思考が発動しており、冒険に集中できない。もっと言うと、問六

た

くなっていた。それでもジャングル育ちのタカちゃんが発見してくれるガガンボをさけながら、どうにかこうにか砂利道の下を流れる排水溝の旅を続けている。僕はタカちゃんの背中にぴたっとくっつき、特攻隊長（注3）が切りひらく暗闇の中を、ときどき上方のすき間からのぞく外の世界にあこがれながら進む。家から幼稚園へと向かうなんでもない道は、じつは砂利道と排水溝という二層構造になっていた。冒険を終えて、家に帰り、温かい夕食を

家族といっしょに食べるのだ、という未来の約束が、僕の不安な気持ちをぎりぎりのところで支えていた。

しばらく進むと目の前が完全な暗闇となった。砂利道の真下にいるのだろうか。暗闇の中でガガンボてい察機を発見するためのレーダーが効果を失い、方向感覚を失い、上下左右も判別できなくなった。恐怖の中、僕とタカちゃんはふと歌をうたった。

「コーバヤーン、コーバヤヤヤヤーン！」

僕のつくった「コバヤン」という歌だ。タカちゃんもこの歌を気に入っていた。コバヤンの歌は暗闇で鳴りひびき、その反きょう音は二人のためのバリアとして作用した。歌は恐怖心と戦うための重要な道具だ。コバヤンへの愛着よりも、どちらかというとコバヤンをこばかにした視点を持つふざけた歌だったが、暗闇では盾^{たて}として機能した。ふざけた歌にふくまれる笑いが、僕らから恐怖を一しゅん、遠のかせた。歌の反きょうが止むと、すぐにまたこわくなる。再びコバヤンの歌を暗闇にぶつける。そのくり返しの中で、歌に合わせた二人の舞^{まい}までが生まれ、ガガンボてい察機の恐怖は消え去った。おくに光が見える。水にぬれることや長ぐつがぬげることをいとうよりも、光とふれ合いたい感情がまさっていた僕らは、コバヤンソングの盾を空中に投げ捨て、光のあるほうへと走っていった。

問一

問七

トンネルをぬけるといつも橋の上からながめていたドブ川に出た。いつもは見下ろしていたドブ川から、世界を見上げた。同じ空間であるはずなのに、橋の下から見る風景は新せんだった。空間は別の角度、別の高さから見ただけで、変ぼうするのだと知った。

「なんね、恭くんとタカちゃんたい」

上から声が聞こえてきた。新宮町立新宮小学校一年二組の同級生、吉村と田村だ。彼らは電電公社集落とはまた別の、線路をはさんで分けへだてられている古くからの集落に暮らしていた。僕とタカちゃんはときどき彼らの集落にせん入し、ファミコンでいっしょに遊んだ。

吉村と田村は橋のガードレールにひじをつきながら、僕とタカちゃんを見下ろしている。なぜ彼らがそこにいたのかというと、橋の後ろ側にきよ大なペンペン草の生えた空き地があったからだ。僕らはよくそこでいっしょに遊んだ。空き地は三つの集落が交差する地点にあり、交易の場であった。吉村と田村はそこでだれかと遊ぶ約束をしているらしい。たこ上げだろうか、箱おにだろうか。ふだんであれば僕とタカちゃんは問答無用でいっしょに遊ぶところだが、今は冒険の途中である。しかもこれまで体験したことのない危険となり合わせの状態だ。仲間が必要であると感じた僕は、彼らにこの冒険が面白いものであることを伝えようと思い、こちらから見える風景がいかにすごいかを力説した。しかし二人は乗ってこない。そこで、ドブ川の河岸に置いてある発ぼうスチロールの箱を見つけた僕は、それを持ってきけんだ。

「これは船になる！」

問八

フライング気味きに新たな物語を生み出そうとしている僕を見て、タカちゃんがす早く動いた。

問九ア

「恭くん乗りな！ オレが支えるから！」

僕は少しおびえながらも、橋の上の二人へのアピールを欠かさず、発ぼうスチロール製の船に飛び乗った。船は一しゅん、深くしずんだが、それでもぎりぎりのところでういた。

問九イ

「おー、船だ！ すごい！ すごい！」

タカちゃんはさけびながら、船が流れないように両手でしっかりと発ぼうスチロールをつかんでいる。ドブ川の主流は排水溝よりも格段と深くなっていた。吉村と田村をさそいこむために、僕は発ぼうスチロールの上で船

長としてふるまう。^{〔注4〕}マーク・トウェインのえがく、冒険野ろうで少々あられずりなところもあるアメリカの少年

みたいなそばかすはおの人間を演じた。先にはさらなるトンネルが見えている。入口のあなは先ほどぬけてきた排水溝とは比べ物にならないほど大きく、そして、暗い。

とにかく僕は^{〔注5〕}パーティーを組む必要を感じていた。だからこそ僕とタカちゃんによるこの水辺の冒険が、む

ちゃくちゃ楽しく、空き地で遊ぶよりもはるかに価値のある行為であることを吉村と田村に示そうと試みた。最初はあきれて笑っていた二人だったが、ガードレール^{ごし}にも前のめりになっているのがわかった。それでも「約束があるから」と橋の上から残念そうに言う。なにかもう一つ、もう一おしのふるまいが必要だと感じた僕は、呪術師^{じゅ}のようにおどりながら、再びコバヤンの歌を口ずさんだ。みんながあっけにとられている。タカちゃんでも発ぼうスチロールを手放してしまいそうになったそのしゅん間、僕はからだをさっと起こし、両足をぴんとのぼして船の上に直立した。それを見た吉村、田村、そしてタカちゃんまでもがきょうたんの声をあげた。しかし、そのしゅん間からだを動かすのは好きだが運動神経のそれほどよくない僕は、ゆれる発ぼうスチロールの船の上でバランスをくずし、まっすぐに立った状態からコンパスを回すように四分の一の円をえがきながら水面に落ちた。すぐに川底に手がつき、全身びしょぬれのまま僕は立ち上がり、彼らをぼうぜんとながめる。一ぱく置いて、三人の仲間からとてつもなく大きな笑い声が起こった。ああこれでよかったんだと立ち直った僕は、彼らといっしょに笑った。

吉村と田村は乗っていた自転車を空き地にとめ、河岸の土手を下りてきた。彼らもドブ川の冒険に加わることに決めたのだ。吉村はかっぱくのようなでっぴの強い男。田村は細身で頭のよい男。つまりジャイアンとスネ夫^おみたいな二人だ。僕がのび太だとすると、タカちゃんはドラえもんということになる。四人はいつもの仲間なのだが、ドブ川では初めて出会ったような顔をしていた。仲間が増えると冒険の音色はまた変化する。僕の乗る

発ぼうスチロールの船を三人でおしながら、四人は最後のトンネルへ、その暗闇へと足をふみ入れていった。

暗闇の中でガンボてい察機の不おんなプロペラ音を察知しながら歩く僕らは、先に見える点のような光めがけてゆっくりと船を進ませる。同時に潮の香り、それは僕らにとっては干してある魚のにおいなのだが、その新宮の浜独特の香りが風に乗り、鼻こうをくすぐっていく。光から風がふいてくる。生暖かい風だ。僕は顔を見合わせた。僕は、^{問十二}ファミコンの中に入りこんだ8ビットの自分が竜王^{リョウ}をたおしに最後のダンジョン^{注七}へ向かっている。

くような（X）と、不おんな音の先にある幸福なおいをかき取っている（Y）、仲間と冒険を成しとげようとする（Z）、そんないくつもの感情の糸をたぐりよせ、おり重ねる。^{注八}そんなさし子状の布のような感情の建築は、糸を入れることによって少しずつがんじょうに、かつ色あざやかになっていく。光が少しずつ差し、水底も見え始めてきたトンネルの中で、僕は宝物のようなプラスチックや石などを拾い集め、^{問十二}時間かせぎをしなが、少しずつゆっくりと出口へ向かう。

ついに四人の探検家はトンネルの出口まできた。出口は小さなあなだった。そのあなを一人ずつぬけ出ていった。おくびょうな僕は一番最初に出た。最後はもちろんタカちゃんだった。四人をそこで待っていたのは、真っ白い砂浜と、玄界灘^{けん}と呼ばれる海であった。右手の岩の島には松が生えている。鉄条もうの中の松林とはまたちがうあられずりな自然だ。海の波面に向かって僕は石を投げつけた。石は連続写真のように赤い空に点をえがき、海の中に消えていく。白い浜には開いた魚が干してある。どこかで聞いた「いなばのしろうさぎ」という民話が映像となつてうかび上がってきた。それは『古事記』の中では「稲羽之素戔」という名前^{注九}で記されている。西アフリカにも似たような口承民話が存在するそのおはなしは、原型をはなれ、僕の中では以下のように記おくされている。

砂浜にウサギがいて泣いている。どうやら悲しい出来事が起きたらしい。すると、上から雲に乗ってしらが頭の男が降りてきた。おそらくこの男は神様である。神様はウサギに泣いている理由をたずねる。ウサギは向かいの島にわたらないといけないのだが、何らかの理由で泳ぐことができないと説明する。それならばと神様は、ワニを、なぜか古い日本のおはなしなのに東南アジアやアフリカに生息しているはずのワニを、それも大群のワニを、浜から島へと一列にならばせる。ウサギはなみだをふき、ワニというおそろしい動物の背中に乗って、僕の記おくでは口をぱかっと開いたワニの下あごから上あごまでもぴょんと飛び移りながら、島へとわたっていく。しかし、最後の最後でウサギはワニに食べられてしまう。

問十三

四人は白浜の上で、ぼんやりと通過儀礼の余いんにひたっていた。その後、しばらくしてそれぞれの家に帰ることにした。先ほどまでいたドブ川の真上を歩きながら、ここは地下ではどこにあたるだろうか、などとみんな言い合ったりしながら、自分たちがなした旅の興奮を、そのときめきを共有した。もはやただの友人関係ではなかった。新しい部族の誕生のしゅん間だった。自分たちの両親が暮らす集落とは別の、たった四人による部族だ。しかもその部族には四人になる前の、僕とタカちゃん、二人だけの部族の歴史もとけこんでいる。いくつ

問十四

かの集団の気配はまるで何重にも重なったミルフィューユのようだ。たった四人の中にひそんでいる、無数の物語が交差することで生じた共有感覚を体感しながら、夕暮れどきのいつもの帰り道を歩いて帰っていく。地下でくり広げられた冒険は帰り道でも立体的にせまってきた。

問十五

新しい部族を立ち上げた四人はその後もずっといっしょに遊ぶようになった。ガガンボてい察機がプロペラ音を立てていようと、それでも前に進むためににぎり合った手は、僕に、家族という集団をこえていくための新しい共同体の存在を予感させた。仲間の手は母ちゃんの手とは少しちがっていた。かぎあなとかぎの関係性では

なく、ロープや金具などの登山道具のように機能した。手はいくつもの顔、いくつもの用途、いくつもの意味を僕にあたえてくれる。帰路につく僕らは、もうはずかしくて、手をにぎり合ったりはできない。それは恐怖のドームの中でだけ存在する、親愛と相ご扶助の精神を表す記号である。手は助け合いをちかう暗号なのだ。

夜、家にとり着いた僕は、ドブ川の冒険物語をだまっていることができず、弟と妹にさらには親父と母ちゃんにまで話し、こっぴどくしかられた。それでも僕はおこられたことなど気にせず、みんなとつないだ手の感しゅくを一生忘れないでいようと思った。

でも四歳の未熟な僕は、手の持つ複雑さをまだ理解できてはいない。電気信号として無意識下で感じているだけだ。その手をしっかりと今、母ちゃんがにぎってくれている。ドブ川をぬけると、小学生が乗った二台の自転車かスピードを上げて、二人の横をかけぬけていく。

(坂口恭平『幼年時代』)

〈注1〉日本電信電話公社の通称。今のNTTグループの前身

〈注2〉アメリカのルース・スタイルス・ガネットによる作品

〈注3〉「特攻隊」は特別攻撃隊の略称で、決死の任務を行う部隊

〈注4〉アメリカの小説家・著作家

〈注5〉行動をともにするグループ

〈注6〉デジタル通信における情報の基本単位

〈注7〉迷路状の構造物。迷宮

〈注8〉「さし子」は布を重ねて細かくさしぬいたもの

問一 ――部「いとう」と同じ意味で用いられているものを選びなさい。

- 1 運動会の徒競走で二番手と大差をつけたAさんは、喜びをいとわずにゴールテープを切った
- 2 Bさんは、おなかが痛くてしゃがみこんだ友人の体をいとい、一しょに保健室に行ってあげた
- 3 文学賞を受賞したCさんは、人づきあいをいとうあまり、とうとう表しょう式を欠席してしまった
- 4 幼なじみのあまりに急な転校の知らせを受け、Dさんはもはや自分の耳をいとうしかなかった

問二 ――部「僕と母ちゃんはその橋をわたる」とありますが、「僕」にとって「その橋をわたる」とはどのようなことですか。

- 1 大人が厳しくかん視する団地集落をぬけ出て、何が起るか分からない世界に飛び出していくこと
- 2 やたらと競争意識の強い人々が対立している団地集落から温かくおだやかな世界へ移っていくこと
- 3 なじみ深く居心地のよい団地集落とはちがい、新参者をなかなか受け入れない世界に出ていくこと
- 4 自分が日ごろ暮らしているこぎれいで近代的な団地集落とは全く異なる別の世界へ入っていくこと

問三 ――部「自然そのものではなく、かといって完全な人工物でもないあいまいな存在のドブ川」とは、わかりやすく言うところのどのようなものですか。

- 1 コンクリートでがんじょうに整備^セ施工された団地集落の排水溝とは異なり、雑草などが生いじげた盛り土の間を流れるだけの簡素なもの
- 2 川にはちがいないが、自然から発生した雨水などと人間生活が生み出して使い捨てた化学物質などが入り混じったちゅうとはんばなもの
- 3 見ばえをよくするために地下を流れる構造にして汚水をおおいかくしているが、一部は水面が地上に出てしまっているいいかげんなもの

4 団地集落のプールの水が大量に流れこんでも、油やシャボンのよごれがなかなかすすまらないうくらい自然の浄化作用がおとろえたもの

問四

——部「ドブ川は、自分の不自然さを自覚させ、本来あるべき姿の見本となった」とありますが、「ドブ川」は「僕」にとってどのようなものですか。

1 新しい集落で経済的にめぐまれた生活をしながらも実は高級でおしゃれな生活に少しもなじんでいないことを自分に気づかせ、見えを張らない素朴な生活をうながすもの

2 日ごろ暮らしている地域が人間の身勝手な自然破かいの上に成り立っていることを自分に気づかせ、もっと本来の自然そのものと共に生きる暮らしにもどるよう強くうったえかけるもの

3 実はきちんと整えられた生活や生き方にどこか違和感をいだいていることを自分に気づかせ、世の中によごれにまみれながらも先の世界へ向かって力強くつき進もうとする人間の生き方を示すもの

4 これまで世の中のきたない部分や厳しさをまったく知らずに生きてきたことを自分に気づかせ、これから一人前に成長するにはもっと強じんな精神が必要だと教えてくれるもの

問五

——部「タカちゃんと僕とがいっしょに遊ぶことで幕を開ける二人劇の舞台」とありますが、後の文は「二人劇」についての説明です。 **A・B・C**に入る語句をそれぞれ四字以内で書き、文を完成させなさい。

ガガンボを巨大な **A** に、自分たちを **B** に、懐中電灯を **C** に見立て、ガガンボをさけながら冒険を続けていく物語

問六

□にあてはまる「僕」の行動を、「くたくなっていた」につながる形で書きなさい。

問七

——部「コバヤンソングの盾を空中に投げ捨て、光のあるほうへと走っていった」とありますが、このときの「僕ら」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

1 遠くに発見した出口に向かって一歩一歩前進しながら、自分たち二人が作り出した歌の力によって恐怖にうち勝ち、とうとう目的地にたどり着くことができるほこらしさをかみしめようとしている

2 出口の光を見つけたことで恐怖心が一気に消えて冷静さを取りもどし、今やるべきはふざけた歌を歌うことではなく冒険をやりとげることだと思い出し、任務に集中しようとしている

3 出口が見えたときこれまで二人で歌いながら進むことで生まれたたがいへの信らいと結束をかなぐり捨て、なんとか相手を出しぬいて自分が先に外に出ようとしている

4 外とのつながりを示す光の存在によって出口が近づいているという希望がはっきりと見え、支えとなっていた歌も忘れて、閉ざされたトンネルの暗闇から一刻も早くぬけ出そうとしている

問八

——部「フライング気味に新たな物語を生み出そうとしている僕」について答えなさい。

①「新たな物語」とはどのような物語ですか。簡単に書きなさい。

②このときの「僕」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

1 ばつぐんの演技力と存在感で注目を集め、吉村と田村の目を冒険の危険性からそらしている

2 しゅん時に機転を利かせて持ち前の想像力を発揮し、吉村と田村を冒険にさそいこもうとしている

3 危険な冒険におじけづく吉村と田村をよそに、新たな冒険への期待をおさえられなくなっている

4 隊長であるタカちゃんをさしおいて、吉村と田村をしたがえた冒険にいともうとしている

問九

「タカちゃんが早く動いた。『恭くん乗りな！ オレが支えるから！』」（——部ア）、『おー、船だ！ すごい！ すごい！』タカちゃんはさけびながら、船が流れないように両手でしっかりと発ぼうスチロー

ルをつかんでいる」——部イ——とありますが、このときの「タカちゃん」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 僕の発案に感動して二人を仲間に取り入れる目的も忘れ、次の冒険のことで頭がいっぱいになっている
- 2 一見協力的に見せつつ、とつ然僕にうばわれた冒険の主導権を取りもとそうと大げさにふるまっている
- 3 僕の行動にすかさず反応し、冒険仲間を増やそうとする僕の作戦をいつもの実行力で後おししている
- 4 自分の足で進みたい自然児の本能をおさえ、仲間を増やすために船旅のおもしろさを強調している

問十

——部「一ぱく置いて、三人の仲間からとてつもなく大きな笑い声が起こった。ああこれでよかったんだと立ち直った僕は、彼らといっしょに笑った」とありますが、このときの「僕」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 思いがけない失態に落ちこんだが、笑顔で自分をなぐさめてくれる仲間の温かさのおかげで、大した失敗ではなかったのだと思い直し、前向きな気持を取りもどしている
- 2 うっかり水に落ちてこん身のパフォーマンスが台無しになったと思われたが、かえって仲間の気持が一つになったと気づき、いよいよ四人の冒険が始まると確信している
- 3 びしょぬれの自分の姿を見て大笑いする仲間のぶえんりよな態度に最初は腹が立ったが、しだいに自分でも笑いがこみあげてきて、明るく開放的な気持に変わっている
- 4 せっかく仲間を冒険にさそうために演技したのだが、最後の山場がシナリオ通りにいかず仲間には笑われて気分を害し、当初の目的などもはやどうでもよくなっている

問十一 — 部 (X)・(Y)・(Z) に入る語句の組み合わせとしてふさわしいものを選びなさい。

- | | | | | | | |
|---|---|------|---|------|---|------|
| 1 | X | 臨場感 | Y | 解放感 | Z | 切ばく感 |
| 2 | X | 危機感 | Y | 違和感 | Z | 使命感 |
| 3 | X | 正義感 | Y | そう快感 | Z | 一体感 |
| 4 | X | 高よう感 | Y | 安ど感 | Z | 達成感 |

問十二 — 部「時間かせぎをしながら」とありますが、このときの「僕ら」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 排水溝での二人だけの冒険では恐怖心から出口に向かって一目散に走ったが、ドブ川の冒険は四人になったのでゆうが生まれている
- 2 トネルの向こう側はどんなに光がさして明るくても何があるかはわからないので、なかなか外に出るふんざりがつかないでいる
- 3 ドブ川の終着点が少しずつ近づいてくるにつれて残りわずかになっていく仲間との大切な冒険の時間をじっくり味わおうとしている
- 4 自分たちだけで冒険を成しとげた証としてプラスチックや石などを少しでも多く集め後で家族に見せようとしている

問十三 — 部「四人は白浜の上で、ぼんやりと通過儀礼の余いんにひたっていた」とありますが、ここでの「通過儀礼」とはどのようなことを表していますか。

- 1 日常では考えられない恐怖の冒険を体験することで、勇気と根性をためすこと
- 2 冒険をやりとげ、子どもから大人へと自立する第一歩をふみ出すこと

3 長時間かつ長きよりの冒険を通じ、世の中の仕組みの一部分を学ぶこと

4 冒険の中で自分の得意不得意に気づき、自分の将来を考えるきっかけを得ること

問十四

——部「もはやただの友人関係ではなかった。新しい部族の誕生のしゅん間だった。自分たちの両親が暮らす集落とは別の、たった四人による部族だ」とありますが、ここで誕生した四人による「新しい部族」とはどのようなものですか。

1 さまざまな地域から集まり、親や兄弟にはその存在を明かさない約束を交わした同年代の者たちで作る秘密の組織

2 生まれながらにして序列がしっかり決まっている親族とはちがって、差別を許さずあくまでも平等な関係を保つ集団

3 数々の長い歴史を持った親類縁者という集団を捨てて、何一つしがらみを持たない者同士が共同で目標を達成するために立ち上げた組織

4 血縁でできた最も生活の基ばんとなる集団とは異なって、何かを成しとげたことによって精神的に共通するもので結ばれた集団

問十五

——部「仲間の手は母ちゃんの手とは少しちがっていた」について答えなさい。

①「母ちゃんの手」は「僕」にとってどのようなものですか。

- 1 僕のまわりの危険をす早く察知し、あらかじめ取り除いてくれるもの
- 2 僕のまちがいを正し、進むべきふさわしい方向をさし示してくれるもの
- 3 僕という存在と切っても切れず、外界から僕を守り導いてくれるもの
- 4 いつでも僕の気持によりそい、未知の世界に飛び出す勇気をくれるもの

②「仲間の手」は「僕」にとってどのようなものですか。

- 1 おのおのが自分らしい役割を果たしてたがいを補い合い、かたい信らいときずなで一つに結ばれてい
ることを感じさせるもの
- 2 どんなことがあるうと危機的な状況にあるときはいち早くかけつけ、おのおのが全力をつくして
支え合うことを約束するもの
- 3 少しくらいの弱点があっても、たがいに助け合うことで本当はだれもが自立した一人前の人間なのだ
と確信させるもの
- 4 自分一人ではなく他者の力を借りてこそ初めて自分らしさを発揮し、物事を成功に導くことができる
のだと気づかせるもの

「二」次の文章を読んで後の問に答えなさい。

建築家にとって大切なのは、空想する力だと僕は思う。建築家の仕事とは空想を原動力に、問二
をカタチにしていく仕事だ。

A

問三

なぜ建築家に空想力が必要なのか。建築の設計をする際、解決しなければいけない課題やクリアしなければならぬ条件は無数にあり、法規（建築の法律のこと）も当然ある。そのうえで、人々の夢や思いを重ねていく。ともすると、課題や問題解決に注力してしまいがちだ。でも課題解決だけでは、機能的なものをつくれても、人を感動させられるものはいつくりえない。また、みんながいいと思えるような、多数決のようなものを目指して機能的にすぐれた建築はできても、人を感動させるものはいつくりえない。すべてをちょうえつしたうえで人を感動させられる“場所”をつくるのには、空想力が必要だと思っている。

問四

空想と想像にはちがいがあある。空想には変態さがある。この言葉を誤解しないでほしい。辞書を引いてみると、変態の言葉の意味の一つに——ふつうとちがう状態。一ぱん的な感覚からかけはなれた趣向・方向性という意味でこう定的に用いられる場合もある、と書いてある。僕が言いたいのは、この辞書にあるように、自分の感覚や欲求、しょう動を純すいに、どん欲に追い求めていくことだ。

空想は時として、人に話すのははずかしいようなものも多分にふくむ。僕は小さいころ、木の上に登ってよく空想にふけていた。空想の世界では木の上はお城であり、そこには王様のいすがあった。音楽も流れていたし、僕はそこに王様気分ですわっているのだ。木の上は僕にとって何を空想しても許される場所だった。そのとき僕はどんなことだってできると心の底から信じていた。

初めてピラミッドを計画した人は、いろんなことを空想したにちがいない。そして実現することを強く願った。そうじゃないと、あんなに大きなものを紀元前に人の手でつくるなんて、できるわけがない。エジプトでピラミッドを見たとき、す直に感動した。これを人間がつくったのかと。空想力が成し得た建築というのは、【①】
問一
何千年という時代を経て、建物自体は風化したとしても、当時の人々の思いや夢がそこに残る。そして、多くの人々を感動させるのだ。

空想力は、だれにでも備わっている力だと思う。

だれしも子どものころはよく、大人からすると「なんでそんなことを考えるの？」と思うようなことを考えていたのではないだろうか。それがはずかしいなんて、みじんも思っていなかったはずだ。自分の欲求にす直に従い、空想をふくらませていく。
問一
【②】、大人になると先に頭で考えてしまい、人の目や評価を気にするようになり、ばかばかしいと思われるような空想をやめてしまう。

空想の根っこにあるのは、とても個人的な欲求や思いだ。想像力とは、目には見えないものをイメージする力のことだが、それだけでは常識のはんちゅうをこえることはない。しかし空想力は、想像力を軽々とこえていく。だから、人に「なんでそんなことを考えるの？」と言われることだったとしても、僕はその空想を否定しない。

でも、合理化や効率化を求め過ぎると不合理に思えたり、とっぴょうしもない空想はネガティブにとらえられたりして、少しずつ排除されてしまうことはもったいないことだ。僕はそれに違和感を覚える。空想力ということでも個人的なものは、
問五
B 建築をつくる原動力になる。

問一 「 ① ②に入る語を選びなさい。

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|-----|---|-----|---|------|---|-----|---|------|
| ① | ア | まるで | イ | まさか | ウ | たとえ | エ | どうか | オ | さぞ |
| ② | ア | しかも | イ | それで | ウ | すなわち | エ | しかし | オ | それとも |

問二 **A** に入るふさわしい内容を書きなさい。

問三 — 部「なぜ建築家に空想力が必要なのか」とありますが、どのようなことのために「空想力」が求められているのですか。十字以内で書きなさい。

問四 **【** 部全体の内容をふまえて、筆者の考える「空想力」とはどのようなものか、四十字以内で書きなさい。

問五 **B** に入るものを選びなさい。

- | | | | |
|---|------------|---|------------|
| 1 | だれにも理解できない | 2 | その人にしかできない |
| 3 | 長く国家の歴史に残る | 4 | だれからも評価される |

問六 次に示すのは、同じ著書にある別の一節です。これを読んで、後の問に答えなさい。

今、大阪・関西万博のパビリオンの設計をしている。^{〈注1〉}
^{〈注2〉}

空想の始まりは、クラゲだった。

クラゲを見ているとあきない。

いつまでも動き続ける、ゆらゆらと遊んでいる——クラゲは水のように生き物なのか、動物なのか植

物なのか、オスなのかメスなのかよく分からない。

だけど、クラゲには永遠の命を感じる。

よく分からないけれども、とても魅力的に見える。

今この世の中にあるものは何かになろうとしている。何かにならなければいけない。だけど、クラゲはいつまでもゆらゆら水の中で遊んでいる。

訳が分からないものの、象ちょうとしてのクラゲ、僕はクラゲのような建築をつくりたいと思った。大きな傘^{かさ}の、ゆらゆらと動いている建築。

〈注1〉二〇二五年大阪で開さい予定の日本国際博覧会のこと

〈注2〉展示館

〔問〕 あなたも一つのパビリオンを設計することになりました。

① どのようなテーマで作りますか。

② どのようなパビリオンを作りますか。具体的に百八十字以内で書きなさい。

〔三〕 次の――部 1 ～ 5 のカタカナの部分を漢字で書きなさい。また――部 6 ～ 8 の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

建築シザイ¹

ゼイシュウが減る²

センセイ君主³

小屋でウサギをかう⁴

熱をオビる⁵

可燃物⁶

額のあせをふく⁷

災害を防ぐ⁸

（問題は以上です。）

＊問題文に使用した作品における難しい漢字表記は、現在一ぱんに使われている漢字またはひらがなに改めるか読みがなをほどこすかしてあります。また、送りがなを加えたりけずったりしたものもあります。

ここは余白です。

ここは余白です。

ここは余白です。

ここは余白です。
